



# 自然体験活動から学ぶもの

## — 教えない教育 —

なぎさ公園小学校  
教諭 上野 和之

近年、自然体験活動の重要性が子どもたちだけでなく、教員志望の学生の資質に影響することや、社会人として社会性の基盤となるためのものとして捉えられるようになってきました。これほどまでに、幼少期から青年期までの自然体験活動の重要性が声高らかに叫ばれるようになったのはどうしてなのでしょう。それは、恐らく日常の中では経験できないことが非日常体験として行われる自然体験活動の中にあり、その体験こそが現在においてとても必要だと多くの人々が感じているからに違いありません。

### 自然(場)の力

なぎさ公園小学校では、4年生から体育の時間の中に「冒険あそび」という授業があります。冒険教育や環境教育、対人関係能力を構築するプログラムなどを織り交ぜて、NAP(なぎさアドベンチャープログラム)というなぎさ公園小学校独自のプログラムがこの授業では展開されます。通常は、学校内で授業が行われますが、学期に1回程度1日をかけて沼田校舎の里山の中で「冒険あそび」が行われます。将来そこにキャンプ場を作ろうと荒れた里山を整備する中で、残っている切り株を取り除く「森の再生」プログラムでは、子どもたちは、スコップやバチツルハシなどを使ってグループで切り株を掘り起こします。子どもたちには、道具の正しい使い方などの安全面は指導しますが、それ以外は一切指示を出しません。初めのうちは道具の取り扱いで揉め、そして、掘る切り株をどれにするかまた揉める。そ

のうちそれぞれの道具で1本の切り株を掘り出すと次第に揉め事が減っていく、やがて「そっち側に根があるから気をつけて」とか、「こっちをだれかほって!」という声が聞こえ出します。そして、無我夢中でグループ全員が1本の切り株に向かって掘り始めるのです。子どもたちのすごいところは、このような順応性であり、また、自然(場)の持つ力がそれを引き出し、育んでいくのです。



この場合、森とそこにある切り株が先生役とも言うべき役割を担っているのですが、もちろん、切り株はしゃべらないし、森も手助けをしない、そこにいるだけです。自然体験活動で学ぶことの多くは、教えるのではなく「体験させる」ことによって得られます。こうしたらいいとか、ああしたらいいなどと細かく指導するのではなく、子どもたちに体験させる環境をつくってあげ、そして、サポートしてあげることです。松の切り株は、根が出てきてもまだその下に幹があって、とても掘り起こすことが大変なことを子どもたちはそこで初めて知ります。苦労

して掘り起こした切り株を手にした子どもたちの笑顔の中に、「教えない教育」がそこにあることを我々教師は感じとるのです。

### 教えない教育・負の体験

冬に行う火おこしプログラムでは、各グループにマッチ5本と新聞紙を1枚渡して、火をおこすように指示を出します。いきなり火をつけ出す子どももいれば、前回からの反省で準備を話し合うグループもある。決まった(正しい?)方法や段取りは特に指示しません。先にも述べましたが、体験させる環境を作ってあげることが自然体験活動では重要であって、How toを教えるのが目的ではありません。



しばらくすると、マッチ5本とも使いきったグループが出てきます。何とか自分たちだけで火をつけようと木と木を見よう見まねですり出す子どもたちや、「ライターはないですか」と言う子どもたちなど様々な状況が見られます。中には、引率でついてきた教師が見るに見かねて手出し、口出しをすることもありますが、成功体験が子どもたちにプ

ラス要素として与える影響を考えてのことだろうと思うのですが、そこには普段教師が無意識に行っている大きな落とし穴があるのです。プラス体験を否定するわけではありませんが、プラスの体験よりもはるかに価値のある体験が「負の体験」、つまり、「失敗をする」という体験が自然体験活動の中では重要なのです。



### 学習+経験 = 知恵(社会的能力)

子どもたちの能力には、限りない可能性が秘められています。将来、社会に出て行くだけの力をつけるためには、勉強ができるなどの個人の能力(学習など)だけでなく、社会を生き抜いていく知恵が必要です。その知恵をつけるためには、自然体験活動は欠かせないものだと思います。非日常生活の空間の中で、様々な活動を通してお互いに葛藤し、失敗し、共に喜び合うといった



「平和な社会は、意見の異なる者が共存するところから生まれる」(鶴 巖名善徳長石碑 於:沼田校舎)



経験は、日常ではなかなか経験できないものです。人と人の関係を作ることができ、自然や社会全体のバランスの中で、人の痛みや心が理解できるリーダーシップをもった人間を育成する教育が、自然体験活動を通してできる教育だと考えています。

### 宿泊体験(同じ釜のめしを食う)

自然体験活動をする中でも宿泊を伴った体験活動は、さらに子どもたちの成長に大きな意義を持つものです。「同じ釜のめしを食う」という言葉があります。多くの子ども同士、先生方と寝食を共にし、一緒に風呂に入って、同じ条件で生活をする。今の子どもたちには、経験する機会が少なくなったことだと思います。現在、なぎさ公園小学校では、3年生の沼田校舎での宿泊体験活動を始めとして、4年生では沢歩きをしながらゴールの滝に向かう「サマーアドベンチャー」や5年生の島根県の三瓶山の麓で行う「ミュージアム学習」、そ



して、6年生の修学旅行では長崎県の「杵岐」で集団宿泊活動をしています。まだまだ、自然体験活動としては宿泊を伴った十分なプログラムは展開されていませんが、今年度から2泊3日の教員の自然体験活動研修など、実技だけでなく理論武装をし、私学らしい教員の資質向上を目指した研修も行われます。将来的には、テントでのキャンプ活動や雪上キャンプなど、四季を通じた自然体験活動ができることを目標にしています。今後は、3泊以上の集団宿泊活動を子どもたちに体験させてあげたいと思っています。色々と問題点もありますが、長期の宿泊体験を通して得るものの大きさを考えると、何とか問題を解決して子どもたちに長期の宿泊体験をさせてあげたいものです。また、小学校から大学まである鶴学園では、縦割りの組織的な自然体験活動も可能であり、八千代校舎や沼田校舎といった自然溢れる里山と宿泊施設を持っている強みを生かして、いつの日かそのような日が来ることを願いながら、「教えない教育」である自然体験活動を多くの子どもたちと教員で作りに上げていきたいと思っています。

